「お前、嫌ひか。」
「イーヤ、好きや。」
「なんや、フワアや云ふよつてに、嫌いかと思ふた。そんな違ぶ事は措きや。」
「そら俺いかて知つてる。吾が錢で仕て、上様の罪人にならんならん。そんな馬鹿な事は仕やへん。」
「それに内を空けると云ふのは、どういふ譯や。」
「此頃小指が出來てるのや。」
「フム……阿呆らしなつて來た。ショムない。惚氣か。しかし出來たといふのは白か黑か。」
「横町で産んだんは、斑やで。」
「誰が犬の仔を尋ねてる。お前の出來たと云ふ女は、素人か商賣人かと尋ねてるのや。」
「それなら、出て姫の玄人や。」
「云ふ事が丁寧な。出て姫なら商賣人に違ひないが、お前の事やで、ショムない藝妓にでも欺されて居るのやないか。」
「侮りないな。娼妓や。」
「誰が侮つて居るもんか。おやまか。」
「ちやんりん。」

「掛合に喋りないな。また程の好え事を云ふて貰ふて、逆せ上つて居るのやないか。」
「阿呆らしい。程の宜い事を云はれた位で、こんな騒動が起るかいな。」
「騒動。たいさうに云ひよつたなア。どうした。」
「斯う云ふ物が貰ふたアるのや。」
「なんや手紙か。文句に油かけて貰ふて、逆上せてるのやろ。チョツと見せてみ。」
「見せるけども手はきれいなか。穢なかつたら罰が當るで。」
「頂いてよる。なんや。ひとつ。てんはつ。きしやう。もんのこと。オイ喜いやん。これ起請やな。」
「ウム、そうや。」
「フム、ショムない。おい。起請を貰ふと云ふ様な色事を仕いなや。こんな物を貰ふたんは弘法大師さんに髭が有つて手習屋へ行てはつた時分に流行たんやで。ナニ。わたくし。ねんあき。さふらへば。あたさま。オイ喜いやん、このあたさまてこらなんや。」
「あなたさまやけども、なの字がぬけたんや。」
「フム。成程、あなた様と。ふふ。ふふ。オイ、ふふは。」
「そら、ふうふやけども、うの字が脱けたんや。」
「フーム、仰山脱けたアるのやなア。成程ふふのやくそく。いたし。さふらふ。ところ。じつしやう